

構文検査の妥当性と信頼性の評価： 発達的变化をととして

橋本竜作(北海道医療大学 准教授)

【研究背景と目的】

特異的言語障害(Specific Language Impairment: 以下 SLI)は、言語発達を阻害する知的発達障害や感覚障害、発声発語器官の運動障害がないにも関わらず、言語能力に著しい制約が見られる発達障害である。日本語では格助詞の使用や受動態の変換を適切にできないという文法障害として現れる。ただ日本語は格助詞を省略しても、文脈から相手が意味をくみ取ることができ、会話を続けられる。それゆえ、学童期では言語障害の可能性を念頭に置いた見立てをしない限り、その存在に気づかれないことがある。そこで昨年度は SLI の特徴を検討するスクリーニングする検査(構文検査)を作成した。

本研究の目的は、その検査の定型発達児での発達的变化をととして、検査の妥当性を評価すること、また発達障害児での再検査法によって、検査の信頼性を検討することである。

【構文検査の内容】(図1-3)。

- 1) 格助詞の補完：空欄に格助詞を入れて文を完成させる。
- 2) 態の産出課題：動詞の語尾を変えて文を完成させる。
- 3) 文の理解課題：文に合致する絵を4枚の中から選ぶ。



図1 格助詞の補完課題



図2 態の産出課題



図3 文の理解課題

【参加者】

定型発達児 64名(男児 27名)：2年生 19名(10)、3年生 18名(7)、4年生 14名(7)、5年生 13名(7)
 発達障害児 30名(男児 23名)：月齢 94 ヶ月～185 ヶ月

【結果】

定型発達児の結果から格助詞や態の表出と、格助詞と態の関係を理解する能力は2年生から4年生にかけて習熟して、5年生頃に安定すること(図4-6)、発達障害児の結果から SLI 症状は発達性ディスレクシアや自閉スペクトラム症状をもつ児童・生徒の半数以上に見られることが明らかとなった。

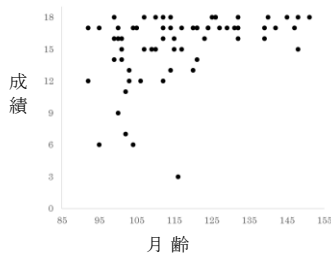


図4 格助詞の補完課題

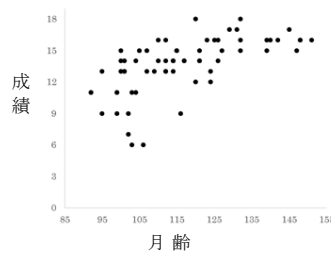


図5 態の産出課題

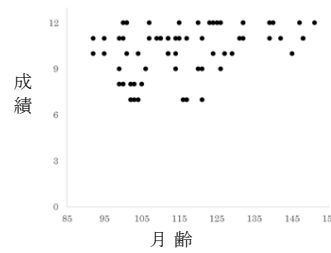


図6 文の理解課題

妥当性に関して、構文検査は非言語性知能とは相関せず、言語の中でも語彙力や語用能力、音読能力とは独立した能力(構文能力)を評価していること、信頼性に関して、すべて高い安定性があることが明らかとなった。

【まとめ】

本研究の結果から、構文検査の妥当性と信頼性が確認された。また発達障害児の中に、少なからず言語症状を持つ例が存在することが示された。本研究の成果は、学童期の言語障害の気づきに役立てられると考えられた。

共同研究者：柳生一自・関 あゆみ